ヴェルサイユ宮殿新城館の国王のアパルトマンと太陽神話
—天井画と広間の間取をめぐって—
THE APPARTEMENT DU ROI IN THE CHÂTEAU-NEUF OF VERSAILLES
AND THE SOLAR MYTH
—On the plafonds and the distribution of the salons—

中島 智幸
Tomoaki NAKASHIMA

At first, the appartement du Roi in the north wing of the château-neuf of Versailles consisted of 7 salons on which plafonds the Seven Planets' theme was painted. The virtues and the scenes in Antiquity that were arranged around the plafonds are related to Louis XIV's virtues and the functions of seven salons. The same thing can be said of the appartement de la Reine. However, the first plan is different from the executed plan. Comparing these two plans, it is probable that the Seven Planets' theme influenced the last that had 3 salon each before and after the chamber.

Keywords: iconology, château, Versailles, Louis XIV, Le Brun, Le Vau

序 約ヴェルサイユ宮殿新城館の建設における天井画について
前編「ルイ14世治下のヴェルサイユ宮殿第2次増築の沿革につい
て」と「ルイ14世治下のヴェルサイユ宮殿第2次増築計画の着工案につい
て」で、国王付首席建築家ル・ブランの設計による新城館、い
わゆる「包囲建築」沿革と着工時の計画案(以下、着工案と略記)の
姿について論じた。しかし、平面とファサードそれぞれについて、
着工案から後に実現された案(以下、竣工案と略記)への変更理由の
検討が課題として残された。本稿では、まず、間取について取上げる。

ここで前編段階における状況を概観すると、着工案は北側に面し
て4つの広間(宴会の間、控えの間、寝室、閑談の間)を持つ、控え
の間を中心とした対称形であると推定した。竣工案は4広間であ
るのと比べると、広間数や壁の位置に違いがみられる(図版1右)。

ル・ギュイエーヴィーは、このプラン変更の理由について、国王や建設長
官コルベールの側からの要求に関して、首席建築家ル・ブランは自
らの左右対称で比例の整った案を、ファサードと何の関わりも持た
ない不規則な形に変えることを求めた、と述べている。しかし、建築の理想が結晶化したもののル・ギュイエーヴィー自身評価する着
工案を変更させた王や大臣の要求が具体的にどういったものだった
のかについては触れていない。筆者は、天井画に何を描くのかとい
う問題が、解決の端緒を開いてくれるのではないかと考えている。

内装は国王付首席画家ル・ブランの指揮の下、1670年から10年を
要して遂行された。この仕事によって、「包囲建築」は舞楽館から大
宮殿への飛躍の一歩にとどまらない意味を持つこととなった。
それぞれ北棟と南棟に配置に位置する国王と王妃のアパルトマン
は、各々3つの広間に各々、それぞれの天井画や装飾は7惑星を象
徴する古代の神々を主役としていた。また、新城館のファサードに
は40体の彫像とそれに関係する仮面彫と装飾が施された。当
時の王侯たちは、知識階級の間で広く共有されていた古代神話
や常識体系を、自らの宮殿の天井画や庭園の形成を上に表現し、その
政治的、社会的、文化的意図を示しとらえた。このような歴史でも、
「包囲建築」はこの宮殿の最初の転破点といえるのである。
もっとも、天井画のatischはル・ブランの手になるものとい
われているもの、鏡の間などの場合と異なり、彼自身の素描を一つ
も残っておらず、これについて十分確かなことはいない。

つまり、天井画の構想が新城館建設過程のどの時点で始まったの
か、それを統括するル・アカデミーの文人たちはどう関わったの
か、史料からは何もできることができないというのである。

したがって本稿では、天井画の主題と着工案の関係に着目して、
着工案は実現できないものであったことを示すこと
によって、そこに着工案の変更の理由と過程を読み取る。
1. 国王のアブラハムとその天井の構成について

ここでいう「アブラハム」は、ルイ13世の城館に位置するものではなく、大アブラハムと呼ばれている部分のことを指す。1864年の現位置への移築まで、ここが国王のアブラハムだった。

もっとも、整備の関係からアポロンの間までの6室からなる現在の大アブラハムの姿は現在の倉庫を推定するものである。竣工当初、この城館全体の国王のアブラハムは7室の広間からなっており、それと対称をなす南棟の王妃のアブラハムも同様だったと思われることが多い。つまり、東側からアポロンの方向へ、広間、衛兵の間、控えの間、寝室、閲覧の間、小寝室、広間の順に並んでいた（図版1左）。

これらの広間の天井は、中央の大絵画と周辺の天井装飾部に配された小絵画群で構成され、それらを織りなすように豪華な天井の装飾が施された。この様式は、首席画家自らによるヴォーメール＝ヴィコン調の宮殿の内装で、さらにピエトロ・ドゥコルトーナによるピッティ宮のデコレーションを施したアブラハムの内装をもとものである。

たとえば、国王の寝室の天井構成は、中央に円形大絵画1枚、天井溝部に円形を帯びた方形絵画4枚配し、その間をミューズ像などをおいたスタジオ装飾が敷め、やはり西隅にも絵画が描かれているというものである（図版2）。これらの装飾要素のうち、焦点になっているのは、当然、中央の大絵画であり、次章にそれらの図像主題を列挙する。

ただし、竣工時の大アブラハムを構成する7室のうち、小寝室と小広間の装飾は着せ替え、小広間に設定されていた装飾は広間の東隣の広間で実現された。また、閲覧の間の装飾は、鏡の間造営のときに王妃の衛兵の間へ移されている。

それでも本稿では城館案の順番にしたがって、広間→衛兵の間→控えの間→国王の寝室→閲覧の間→小寝室→広間の順で述べることとする（図版1右）。関係の間と小寝室の装飾はマリーの研究から補う。

2. 国王のアブラハムの天井画の主要主題について

広間→
ディアクリテの間
ランスシュール作
・「夜の時」たちと「朝の時」たちを伴ったディアクリテの間

衛兵の間→
マルスの間
オードラン作
・白に引かれた風に駆けたマルス、戦争の情熱

小広間→
デュアルスの間
ジャンノワール作
・「恐怖」と「驚愕」を振り立てる「恐怖」、「狂乱」と「戦争」

小寝室→
メルキュールの間
シャンペーニュ作
・「明けの明星」、「技術」たちと「科学」たちを伴い、その間はメルキュールを装飾に作ったメルキュール

絵画群は、同様に「フランス」の観念像を伴う「平和」に伴われ、その中で生まれたアポロン、戦車に乗ったアポロン、スカットのミューズたちに支えられている。

閲覧の間→
デュアルスの間
ジャンノワール作
・「賢明」と「秘密」を示していた若らの女性に伴われている

小広間→
ヴェウスの間
・神々や力ある者たちをその帝政の支配下におくるヴェウス
・ヨーロッパとアフリカの誇り

応動員（絵版画1枚）
・リュクス＝ディプルの間
・テセヒア＝アデーヌ
・シェーンとメデ・　
・アントニウスとクリオパトラ
・ティトゥスと共に入り
・アポロンとダウン
・ガンとパシフィスク

ウーラス
・「四大元素」を象徴する四幅広

図版1．国王のアブラハム城館（左）とそれへの変更前、後の筆者和（右）
ともに上方が西側＝幅面を

図版2．アポロンの間の天井画（筆者撮影）
以上のようにも、天井画には、ディアーヌ、オーダーランク、ジャピネル、甲斐県 mú, アポロン、ジュピテール、サテ纽ス、フェヌスが描かれ、広間自体も「アポロンの間」など、天井画の神々で呼ばれている。これらの神々はそれぞれ天図、すなわち月、火炎、水、太陽、木、土、天、金星象徴している。ただし天王星、海王星、冥王星が発見されていなかったこと、さらに地図に天図板に取って代わっていたことを考えると、アポロンの関を中心に配置した国王と王妃のアポルトは太陽系の姿を表現していることになる。しかし、天井画に描かれた主題は、ただ古代神話の神々にとどまらない。それらが中心的役割を果たしていることは確かだととも、それに関連した諸問題が、それら古代神を重視しているのである。

3. 古代史を主題とする絵画群の役割について

以上のようにも、天井画主題は全て、古代神話の神々へ捧げられており、その神々はそれぞれ固有の権力を持っている。こので、各部間の天井画の神が、どの寓意と結び付けられたのかを一覧する。

| 閆　間　| ディアーヌ | 月 | 狩と航海 |
| 庸兵の間 | マルス | 火星 | 戦争、「歴史」と「名声」など |
| 採えの間 | メルキュール | 木星 | 「用心」、「技術」、「科学」 |
| 獨室 | アピロン | 太陽 | 「寛大」と「仕業」 |
| 宮殿の間 | ジュピテール | 木星 | 「権威」と「公正」 |
| 小寝室 | サテニュス | 土星 | 「賢明」、「秘密」 |
| 小広間 | ヴェヌス | 金星 | 愛 |

以上の七感の主題に基づく天井画中央の主題、および、それに関連する諸美術は、古代史の場面を描いた天井画群の絵画の主題と深い関わりを持っており、当時の案内表は次のように指摘した。

太陽は国王陛下の紋章であり、ゆえに七感がこのアポルトの主要な役割を果たしている。各部は各感と支えの役割を果たし、古代の英雄たちの間連する古代の英雄たちの役割が構築されたもの。

ここで天井画群や他の場面に掲げられた絵画を列挙する。

| ディアーヌの間 | ジャゾンとアルカゼの冒険者たち |
| ラジネール | 隸の牧羊のアレサンドロス |
| オーダーランク | マルス、カエサル |
| 出入口の上の浮遊風景の絵画 | ディアーヌ、アレサンドロス |
| その他、趣をなす絵画 | アレサンドロス |
| サテニュス | ヴェルニエの描画 |
| 青い面 | アポロン |
| マルスの間 | ジャゾンとアルカゼの冒険者たち |
| オーダーランク | マルス、カエサル |
| ジュピテール | マルス、カエサル |
| ラジネール | マルス |
| オーダーランク | ジュピテール |
| ジュピテール | マルス |
| ラジネール | ジュピテール |

ディアーヌの間の場合、ジャゾンとカエサルは航海、キューロスとアレサンドロスは狩の題目に対応する。狩の主題は14世紀が好んだところだ。航海の主題はマダガスカル島の船団などを想起させる。マルスの間は、古代史を主題とする6枚の絵画に、トルコ人に対する勝利など、現在の国王の勝利を表す武具装飾が天井に配され、特に古代史の題目を表すが、これは表現されている。メルキュールの間では、アレサンドロスとアーケラスは遅国の大使を迎える主題と、アレサンドロスとアーケラスは学芸薬草の主題と結び付き、同時にルイのそれも暗示する。アポロンの間では、ミケーネハイドとコロッセウムの建物が「北極」、アレサンドロスとアーケラスが「寛大」を表現する。そして、ミケーネハイドとコロッセウムの建物を示す。
4. 天井画主題が建築設計に与えた影響について

アールトマンの間取への天井画主題の影響を論じる前に、ここで着工案と端工案の違いを示しております。まず、着工案の姿を明らかにすべく、着工案の広間の数と国王の寝室を中心とした位置関係について考察すると、北面に広間4つと並んでいるのは前述のよう

に明らかで、それ自体で、広間は密接な関係を示している。これに対し端工案は、間取をより大切にすると推定されるが、間取の関係を示すには、着工案の関係がより重要になる。つまり、着工案の間取に、間取の数と位置が重要な役割を果たす。このため、着工案の間取をより重要視し、それは南側の寝宮がより重要になる。従って、着工案の間取は、天井画から得られる重要な情報を基に、着工案の間取を考察することができる。

以上の考察に、さらに史料による裏打ちをすることはできない。しかし、ディアーノの間の知しへ上に重要なものに広間を設けてまた、下階の間の位置を無視して一部の広間の間の位置をずらす。したがって、これらの間の位置をずらす。こうして導かれたのが着工案である。

結・まとめ

新憲法の国王のアールトマン各広間の天井画主題は、太陽とその周りを公転する惑星、つまり七惑星を表す古代の古典の神々を中心にしたもので、また、これらの神々が述べた美術に関係がある。アールトマンの間取は、これらの神々の影響を受けており、着工案の間取もその影響を受けている。したがって、これらの間の位置をずらす。こうして導かれたのが着工案である。

ディアーノの間の知しへ上に重要なものに広間を設けてまた、下階の間の位置を無視して一部の広間の間の位置をずらす。したがって、これらの間の位置をずらす。こうして導かれたのが着工案である。

結・まとめ

新憲法の国王のアールトマン各広間の天井画主題は、太陽とその周りを公転する惑星、つまり七惑星を表す古代の古典の神々を中心にしたもので、また、これらの神々が述べた美術に関係がある。アールトマンの間取は、これらの神々の影響を受けており、着工案の間取もその影響を受けている。したがって、これらの間の位置をずらす。こうして導かれたのが着工案である。